

憎らしき快晴

暁 めい（土佐清水市）

眩いばかりの日の光が
容赦なくわたしを貫いている

（空は真っ青

青の青　　）

目玉と耳だけを残し

見事に分解されたわたしは

幾万の手によって組み立てはじめられる

（収束などできるはずもなく）

一読、西脇順三郎の詩を彷彿とさせ
たが、二読三読とするうちに、西脇の
詩は言葉のなかに心的偶像が生成され
ているが、暁さんの詩は言葉のなかに
暁さん自身が生成されていることに気
づいた。目玉と耳、はこの世界を見、
聞きする器官。それを残して分解され
た暁さんは、再度組み立てられた暁さ
んは、暁さんの記憶を保存はしている
が、細胞の組成はかつての暁さんでは

本日は晴天なり！

（雲ひとつない

晴れ晴れとして　果てしもなくあまね遍く）

わたしは粒子のまま　昨日の夕焼けを探す

つづいては、……

と実況を真似る野球少年の声が聞こえて

午後の光はさらに鋭さを増してゆくのです

ない、という暁さんの記憶をもった別
人が生誕することになる。「快晴」と
はそういう「新たなわたし」の生誕を
祝福する神の視線でもある。青春とは
つねに崩壊し、再生しつづける季節で
もある。終連の三行がいい。「青春の
現実」が高らかと自己を主張している。

日曜日

朝比奈 富美男（大豊町）

戦闘機の飛び出して来る

日曜日の朝

蝮蛇まむしは岩場に住み着く

少しづつ天気が悪くなる

この頃

地平線の赤に感動する

最近地球滅亡の映画が人気

みんな何かを感じているのだろうか？

一行目がおもしろい。戦闘機が飛び出して来る日曜日なんてほとんどないが、時々ある。朝目醒めると戦闘機が部屋のなかに不時着しててんやわんやであることがたまにある。おまけに蝮蛇が岩場に住み着いているなんて耳許でささやかれると世界の終わりかもしれないと大仰な反応をしてしまう。それでも毛虫の毒矢は刺さっていることすら認識できないし、鱗粉とい

毛虫の毛は毒矢で

刺さっているのも見えない

やがて蛾になり

鱗粉を撒き散らす

う悪意を撒き散らす成長を妨げることができない。そんな騒々しい日曜日の朝、TVの番組では議論にもならない討論会で人類の「あした」をも見つめられない言葉が乱舞している。

テレビでは人類の将来について

解っているのか解らないのか

議論が続く

帰り道

雨宿り（高知市）

むかし、ぼくには帰り道という道があった。道のさきには、ぼくの家があり、両親がまつていた。

いつからか、ぼくはぼくには帰り道はないのだと、思うようになった。あのときのように、ぼくには帰るべき家が、家族があつたけれど。ぼくは歩んでいる道があともどりのできない、一方通行の道なんだと思った。川の流れのように一度踏んだ道は帰ってこず、すべては過ぎ去つ

てしまふのだ、と。かなしみが昼間の出来事に沈んだ心に輪をかけた。

こんな気持ちのまま、家へ帰るのが気がひけた。飛行機が着陸をやりなおすように、ぼくは長いあいだ街をさまよい歩いた。暗くなった街の空に星の光がかがやく。ぼくはときどき、星の銀貨で心の負債を清算する。

壮年期の雨宿りさんの実感を伴った述懐。ひとはみな、このような決意をしらずしらずのうち（あるいは意図的に）というひともいるかもしれないが）みずから課して生きていく。こどものころのように、遊び疲れたから帰る道、薄暗くなってもかならず自分を家まで導いてくれる道、はいまはなく、世間や他人がひいた道の上を歩くことに迷いはじめた雨宿りさんがいて、

自己懷疑を経て自己修正をしようところみるのだが、長年の自己規制はそう簡単に修正できるはずもなく、街をさまよい歩き、かがやく星を見つけた雨宿りさんはその星のかがやきに自己を転位させることで自己精算しようとする。そういう自己充足でしばらくは「自分の道」を着陸をやりなおさずに歩いていけるのかもしれない、と。

雲泥

安部 時子（高知市）

蓮は 泥の中から
清浄無垢な花ひらく
泥鱈は 安息のねぐらで
愉しむ

融合 離散をくり返し
変幻自在に姿を変えて
確たるものが無いにしても
雲は いつも悠々と

憧れをあつめて浮かんでいる
雲の尻尾にぶら下がっていても
蓮の葉っぱにしがみついても
互いの違いを考えると なにも
どうってことないじゃん と
思えてくる

雲泥の差、とはいえ、泥のなかから清浄無垢な花を咲かす蓮や、泥のなかで安息している泥鱈は、変幻自在に姿を変え、悠々とあこがれを募っている雲となにも違いはない、一見、難儀な状態に暮らしているとおもわれるものでも、根っこには美や安息をかかえ持っているものだ、と安部さんは世間的な規範としての雲泥なんて「どうってことないじゃん」とおもっている。じ

つは、「わたし」もそうだ。泥のなかに埋まっているが、ときどき花を咲かせている。雲のように青い空を印象づけるときもある。生きていけば、雲泥の差なんてどこにあるのだろう。

恐ろしい春

有沢 薫 (京都)

暮れがた
児童公園に
影踏み
影消えていて
ほらー
鬼の足音ばかりです
ぼくはベンチに
腰かけていて
夕闇せまるなか

暮れがたの公園、闇がきて、そこは、春の気配なのに、鬼の足音で満たされる。春という季節とは関係なく、有沢さんは、孤独や侘しき、寂しき、疎外感、寂寥感、といった「この世間での居場所のなさ」という鬼に満たされている。いや、鬼の「足音」に満たされている。鬼は決して姿を見せない。そつと足音だけが忍び寄るだけだ。だからふるい払おうにもその鬼の実体がな

春の気配なのですが
ほらー
鬼の足音ばかりです

いからいかんともしがたい。有沢さんは「鬼の足音」を懐に抱いて、いつ孵化するかもしれない鬼の幻影とともに生きていかなくはならない。

無題

池上 光恵（いの町）

おーい
おーい
病棟の一室から
山彦のように聞こえてくる
男の声
おーい
おーい
通り過ぎていった
茫茫ぼうぼうの歳月を呼んでいるのか

ひとはときどきなにかを呼び戻したくなる時がある。かえってくるはずもない「無垢だったと確信していた幼少時代」「つらいことばかりあったが精神力を鍛えてくれた青春時代」「誤謬ばかりだったと悔いの残る壮年期」。いまとなつてはみんな懐かしいものばかりである。呼んでみたところがかえってくることはないのに、つい声が出てしまう。それが老齢期にさしかかっ

おーい
おーい
なぜだか分からぬが
わたしも呼びたい

て、おまけに体調を崩して入院生活を送っているならばなおさらである。「わたしも呼びたい」。茫茫の歳月のなかに置き忘れてきたことや、取り戻してみたいこと、だれかに自慢のできる一瞬もあつたことなど、「なぜだか分からぬが」おおきな声で呼んでみたい。「わたしはここにいる」。幼年期や青年期や壮年期のわたしにむかつて池上さんは「おーいおーい」と。